

- ◎ ものすごい台風が来ているようだ。ものすごいと形容しているが、気象庁の技術役人の方々は、「非常に強い」「今までに 経験したことがない」「五十年に一度の 百年に一度の」「命を守るための 最善の方法をとってください」というように、それこそものすごい表現がこの何年かで目立つようになってきた。
- ◎ 二年前だったか、住まいの近所を通過した台風の際は驚かされた。それまでは、「台風なんて ちょっとした風 ちょっとした雨 ニュースでおおげさにいうわりには なんとなく過ぎ去っていく」いつもいつもいい方に裏切られ、雨戸を開けながら、「もう通過したのか 台風一過の秋晴れだ」というように戯言も出ていた。
- ◎ 二年前に来た台風も、いつものように雨戸を閉め、家屋の外に出ているもの、風で飛ばされるようなものをかたづけ、溝なんかも水が流れるようにして待っていた。風が吹き出し、だんだん強く家が揺れるような風が何度かやってきた。風で家が揺れるということは初めてだった。この時はいささか驚いた、はっとして顔色が変わるとい気持ちだった。我が家は無事に無害で済んだが、近隣の家々の瓦が飛んだ、看板が飛んだというような被害をいくつか聞いた。同時進行の TV 画像では、高速道路のトラックが飛び、屋根が飛び、飛行場が水没していた。この後停電が二日ほど、ガスが一週間ほど止まった。今の時代に電気は必需品、我が家は短くてすんだが、近隣で一週間以上の停電が続いたところがあった。その方たちはひどくぼやいておられた。ニュースで1 っか月、二か月の停電を報じていたが、これはもう大変だ。
- ◎ おどろいたのは、一週間後に登ったポンポン山の惨状だった。台風のあとなのであまり遠くに行かず、近所のポンポン山に行こうと出かけたが、所々の風の通り道の谷筋や、ちょっとした山の盛り上がりの場所で、大きな樹々が八重に十重に折れ曲がり倒され根を天に向け、道をふさいでいた。「オレは こんなことではかえらないよ」なんて粋がりやぶこぎで迂回、またぎ潜り、てっぺんまで行った。
- ◎ 地球温暖化現象がやって来ている。気象庁も最近の異常気象、雨が、風が、暖かさが、これらはこの温暖化現象が原因のひとつではないのかと言いつつ始めている。地球温暖化現象が 5 年 10 年で急にやってきた異常気象、いささか恐ろしげなものがある。夏のアトリエが 37 度だという、体温を超える暑さが何日も続くという、これでは何もできない、バタリ倒れて昼寝をしても、体中がアセモだらけである。
- ◎ オレは、「はってん：発展」という言葉が引っかかってきている。二十代三十代のころから、「この十年の変化は すごいね よくないんじゃないの」と思っていた。「たった 20 年 30 年で 画材屋に売っているものが 変わるのか」と嘆いていた。
- ◎ 日本全国のたくさんの人たちが、「より 発展を」という合言葉を使って、より豊かに、より便利に、より快適に、過ごしていこうと大合唱をしてきた。もちろん日本全国だけじゃなく、世界中がこの大合唱を叫んでいる。発展の裏側にはいろいろな負の遺産が生まれている。いちいちこの負の話を取り上げないが、負の大きな作用、負の原動量は想像以上に大きい。えらそうにいうオレも、発展のおかげで、それはいろいろな恩恵にあずかっている。
- ◎ 今の世界、発展を旗印に、発展を目標に、人がモノが、思考が金銭が、左右前後に回転しているのだろう。より高く、より長く、発展という旗印のもと、血ナマコになって、目を吊り上げ、ある一点を見つめ、上昇だ、発展だと叫びながら、邁進している形が見える。
- ◎ 縄文時代の 1 億年間でほとんど発展はなかったんじゃないかな、弥生時代の 3000 年間は多少の発展はあったよね。古墳時代から明治時代までは、数えきれないぐらいの発展があったよね。オレが生きた、知っているこの半世紀、もうとても数えることができないぐらいの、それこそ目のまわるような発展があった。これは異常なことだと思わねばいけないことだけれど、ほとんどの人が、豊かに、便利に、快適になったと豪語する。
- ◎ 今日の台風、でかい、危険とおおいに解説しておられる。最大風速は 80M/S。80M とはどんな恐ろしいものか。この風洞実験を見てください、と TV 画像。筒形の大扇風機の前で単車用のヘルメットをつけたスタントマンが、車のドアーにつかまって水平方向に延びている。自転車に乗って転がっている。これは危険だ。

- ◎昨日の夜は寝苦しかった。夜寝る時点で 32 度ぐらいの温度、扇風機のタイマー機能を 2 時間セットしてうつらうつら、「ええい 誘眠剤を飲もう」おかげで朝までぐっすり眠れた。ジジイになると眠りが翌日を左右する、ぐっすり眠れると快調だ。朝は 27 度まで温度が下がっていた。午前中はアトリエで仕事、風が吹いていた、窓を開け風が通り抜けると爽やかである。
- ◎「台風は 遠い所 九州のまだ西側」昼飯を食い、曇天の中、河原に向かった。台風がやってくると空がきれい、昨日も、「クリヤー 明日はカメラを」と決めていた。
- ◎ほとんど白い雲が空を占めその間に青空がある、白も青もクリヤー。台風君が居るあたりの西の空は黒い雲が重く立ち込める。時々晴れる、晴れると残暑の今の太陽は暑くて痛い。太陽君早く雲の中に入ってくれと思いつつ走っていたが、まもなくストレッチベンチというところになって、10 分前まであったあの黒い雲、重く垂れこめたやつが消えている。青空にウロコを刷いたような白く薄っぺらい雲がふわり横たわっておる。「急転直下 いつの間に こうなったのか」である。
- ◎ このベンチはいつもの場所、いつものベンチ。先ほどまで野球少年が体操をしていたが、土手の向こうの野球場に行ったようだ。オレがよちよち走っていると、連中のみんなが、「すみません」と頭を下げ挨拶してくれる。コーチに、「歩道を 占拠しているので 挨拶しろ」と言われているのだろうけれど、全員に頭を下げられるのがあまりうれしい状態ではない。
- ◎ 太陽が雲間にかくれ、風が吹いて涼しい。紫蘇ジュースを入れた水が旨い、跳んで撥ねて、座って、足を上げて、ストレッチ体操。これは身体にいいねえ。友人が、「この体操は 身体にいいんだよ」とやっていた、「オレには向かない オレにはできない」そう思っていたが今はすっかりはまっている。
- ◎ 先日来、「白山に登りたい」という思いがだんだんオレの中で高まっている。「白山 そらあいい いきましょう」言ってくれた人がいる。どういうルートがいいか、どこで泊まるのがいいか、いろいろ思い悩んでいた。「甚之助避難小屋が いいよ」「避難小屋は このコロナ禍 どうかな」「別当出会いの駐車場は 平日しか入れない」いろいろ考え悩んでいた。地図をにらみ、「竜の馬場：りゅうのばんば」が載っている。「あれこれ これは 昔 泊まったことのある ところか」「目的地を ここに設定すれば うまくいくのでは」何やかやと考え中である。
- ◎ 今日の空は好きな空だ。小規模入道雲があっちゃこっちゃんに、その隙間に青空、もこもこ白と青、垂れこめた黒い裏側、荒々しさとすがすがしさが同居している。河原は風が吹いている、ちょっとした風、この風が上空にいけばどんな強風になるのかな。
- ◎ 思い出すのが硫黄岳の強風。80 キロのザックに重い荷を背負って上に出ると、四つん這いになっても進めない強風。巨大なケルンが何か所もあるが、そのケルンをつかまえては次のケルンへ、火口へでも飛ばされたら一巻の終わりだと必死に進んだ、10m 進むのに 10 分かかったかなというようにゆっくり進んだ。防災センターで風速 30M を経験したが、30M はたいしたことが無いな、と思ったものだ。
- ◎ 毎日のことだけど、河原のベンチで上を向いて足を上げる体操をしている。足を体の上にあげて 30 回、腹筋かな背筋かな、詳しいことはわからないが、以前 TV で教えていた体操のひとつ、この体操を毎日の動きのひとつに取り入れている。空を見る、天を見る、考えてみればこの時ぐらいだね。一日に何分か、空を見ている、まぶしい時間帯では目をつぶっているが、まぶしくないときは空を見上げている。「ええ あんな高いところに 鳥が」「飛行機が」「雲の動きが早いなあ」「月が出ている」「おお チョウゲンボウ君じゃないか」「すぐそばを どこに行く」「ハトが カラスが サギが カモが ウが」「ゴイサンが」
- ◎ 寝るときは上を向いて寝ることが多い、上を向いて寝るが、天井がある、天井のないところで寝ころぼるのは、このベンチぐらいだ。山に行ってもテントの中、わざわざ外に出て空は見ない。「岡村さん 起きて 星が 月が すごいよ」この言葉は何度も聞いたが、「むにゃむにゃ」そっと見てすぐに潜り込んで寝てしまった。若い頃から、空とは縁のないタイプ、空を見ないヒトであった。

神野志隆光著<古事記の世界観>

◎「記紀」、「古事記」と「日本書記」は比較対照して論じられることが一般化した方法となっている。とくに神話に関してはその成立展開を見るのが常道になっている。相似た話が連なり、プロットの枠としても似ているようであるが、基本的には全体を貫く糸はまったく異質だといわねばならない。

◎日本書記を読んだこともないオレにとって、この言葉に従って古事記を齧ってみたい。「齧るとは ネズミが果物を 齧るような 表現を・・・」と笑われるかもしれないが、オレにとって、知識を仕入れたいのではなく、ちょっと昔話を知ってみたいということですよ。

◎天地（あめつち）初めて発（おこ）りし時に、高天原に成せる神の名は・・・。

◎高天原に成せる神の名は、「天之御中主：アメノミナカヌシ」「高御産巢日：タカミムスヒ」「神産巢日：カムムスヒ」この三柱の神は、みな独神：ひとりがみと成りまして、身を隠したまひき。

◎国は稚（わか）く、浮ける脂の如くして、くらげなすただよへる。

◎次に、二柱の神も、みな独神：ひとりがみと成りまして、身を隠したまひき。続く神々も同様に現れ消える。

◎高天原に成せる神の名は・・・の高天原という名の、「天」世界はすでにある。一方、「地」の側に世界としての、「国」はまだ確立していない。「国」という体をなしていないのである。

◎本居宣長の古事記伝では、天地のはじまったこと、高天原という世界はあることが無条件の前提として、古事記は始発する。それに対して日本書記は、天と地がいかに始まるかが述べられている。

◎三神：古事記の冒頭部に登場する三人の神。この話は少し前にも書いたが、右から左なのでもう一度。

「天之御中主：アメノミナカヌシ」天地（あめつち）初めて発（おこ）りし時に、高天原に成せる神の名は、天之御中主。

たくさんの神々が登場する古事記の中で、一番最初に登場。天があり地があり世界となった。時が動き出し、天に高天が原があり、最初の神があらわれた。

次に この二神があらわれた。「高御産巢日：タカミムスヒ」「神産巢日：カムムスヒ」「むすひ」は「産霊」と書く。古事記伝：すべてものを生み成すことの御霊。

◎古事記で最初に登場する三神は、登場しすぐ身を隠したまひき、となる。ムスヒの二神は後程登場する。

◎古事記伝では、タカミムスヒに偏っているが、すべての根源たるムスヒのエネルギーというべきものを本質的に抑えている。アメノミナカヌシについていえば、あめの統括者として、高天原の根源であり、これを頂点に戴くことによってムスヒの神も働きうる。作用するのはムスヒのエネルギーだが、それはアメノミナカヌシを待つて開始するのだというべきであろう。

◎最初の神、アメノミナカヌシは考え方が中国大陸的で、当時の中国の考え方や思想などを取り入れたものだという方もおられる。その真偽はわからないが、当時の記紀なども漢文や漢字で書かれていること、大陸の文化が入り込んでいたことなどを考えれば、あり得る話かと思う。

天や地やら、と言われ、宇宙・深海というような見えない世界、未知で不思議の世界への想いが馳せるのは人間として当然かもしれない。宇宙はまだ見える、太陽や月や星は明らか見える。水の中、目の届くところまでは見えるがその先はまったくの未知の世界、未知の世界に考えが及ぶのは当然だ。未知の世界、何もわからないところから何かやってくる、何もいないところに何かやってくる、この考え方には賛成だ、面白い。

- ◎7:30 坊村から登り始める。5:30に家を出、二人を誘って2時間弱でやってきた。同道は前川・上西の両様。
- ◎秋雨前線というのがあるらしい。この数日、天気予報は日々、晴れと曇りと雨の三つ揃い。大阪にいても、一日に、10分とか30分とか小雨が降る。こんな雨なら登れるだろうと、昨日決行を決意した。
- ◎早速の急な登り、急とはいえ二本足で歩けるが、ヒーヒーである。昨日、車の高齢者講習会があった。「一時停止のラインは 超えない 完全に止まる」そんなことは知っていると思ったが、昨日の実習ではジワリと滑らせてしまった、癖になっているようだ。今朝の2時間の運転、一時停止を実行してきた、なるほど、である。
- ◎30分で林道にやってきた。今日はまっすぐ登って鎌倉山を目指す、次回また林道から入ってみたい。林道の終点から、地図にない所を登って、登山道に合流するルートを再度行ってみたい。
- ◎1時間足らずでブナ平にやってきた。このあたりはなだらかな登り、植林地帯とそうでないところがある。雑木林の中には立派なブナ、モミ、クリが堂々と立っている。陽の光が見える、光を通して葉っぱがきらきら。
- ◎登山口のそばは雨露で草や木の葉っぱが濡れていた。おひとりの首筋にヒルがいた、オレはまたも無事でした。
- ◎2時間弱で鎌倉山のとっぺんにやってきた。先ほどパラパラ降ってきたが、今はおさまっている。空は黒く今にも降りそうな雰囲気だけれど、オレの予想ではこんな天気のまま最後まで降らないのではと身勝手に思っている。ここで手作りのサンドイッチをほおぼった。長袖のシャツ一枚、風は涼しい、まだ上着はいらない。
- ◎GPS 君と同道するのは3回目。やっと慣れてきたがまだまだである。フル充電なら10時間ぐらいいは持つようだ。車のナビと同様、オレが進むと矢印も進んでいく。多少の誤差はある、高度は正確なようだ。家でじっくり国土地理院の地図を見て、GPS 君に迷いやすそうなところに印をつけて・・なんて歩きながら思った。
- ◎11時過ぎにオグロ峠にやってきた。水を1本消費したので、パイプからペットボトルに水を入れた。暑い時は冷たくて旨いと思ったが、今日はその冷たさが感じられない、ただの川の水だ、なんて失礼。
- ◎オグロ峠には地蔵さんが祀ってある、道中安全祈願かな。おそらく百年前までは、通行道、北の村：久多と、南の村：花背を結ぶ街道とまではいかないけれど、村人が往来していた道ではないのかな。
- ◎30分で峰床山のとっぺんにやってきた。この道筋にはお気に入りの樹々がたくさんある。折れ曲がったもの、腐りかけたもの、苔に覆われたもの、声をかけたくなるものとの再会である、よおっと。
- ◎昼飯はいつものように玄米ご飯に梅干しを入れたもの、野菜を炒めたものを詰めてきた。おふたりからちょっとおかずを分けていただき、旨い旨いと満腹。頂上には枯れた幹がある、乾いた季節はまっ白な樹の幹がとがっているのだが、今日は湿度で薄汚れている、まっ白ではない、と残念がって写真を撮った。
- ◎いつもは反時計回りにぐるりと湿原をめぐるのだが、につつきヒル君を避け、もと来た道に戻っている。
- ◎考えてみるに、今日の山は、出発点の坊村からまずは登って鎌倉山へ。続いて、鎌倉山950Mと峰床山970M、この二つの山を尾根道づたいに進んでいく。尾根道は登ったり下ったりいくつかの100Mぐらいの高低差のポコポコがある。普通の山行では、復路はほとんどが下りだけれど、このコースは、往路も復路も同じように登ったり下ったりが続きなかなかしんどい山である。おまけにこの尾根道、ポコポコが少ないところは右へ左へ、迷って行ってしまいそうな場所がいくつもある。しんどい、迷う、ここはこれが魅力・・かな。
- ◎まもなく鎌倉山というポコポコの登り、横に踏み跡、これは獣道、シカの道かなと思える巻道。行ってみようかと進んだ、シカの道なので細い、危ない、斜面を転げ落ちないように、おっとと、行きつくと前に赤い印がある。まだもうひとつのポコリン、ここにもシカの道、再度挑戦と進むとまたまた赤い印がある。ポコポコを二つもとくをした、シカもポコポコは嫌なのかねえ、うまく巻道を作ってくれているものだ。山の登山道は、無駄な登りを避けるために、斜面をぐるり巻いてある道がある、それを巻道とか、ショートカットとかいう。
- ◎2時、鎌倉山に帰ってきた。ビスケットと凍ったグレープフルーツをいただいた。オレは昨夜、フルーツゼリーを人数分冷凍庫に入れていたが、朝持ってくるのを忘れた。今日はいただくばかりでごちそうさま。
- ◎3時前に車に帰ってきた。8時間ぐらいい山の中だった。もし降られたらと着替え一式を積んでいたが、雨に降られることもなく、タオルで身体を拭いてシャツだけ着替えた。家に帰ったのはまだ明るかった。

◎「天之御中主：アメノミナカヌシ」この名前、何度も書きながら覚えられないという体たらく。なので、解釈を試してみた。「天の 宇宙の 真ん中の主」これで大丈夫かな、それともまだだめかな。天とは宇宙のことなら、1500年前の人たちが、天を仰いで、宇宙を感じて、なんて想像するだけで壮大な気分になるねえ。

◎663年 白村江の戦い（日本&百済遺 VS 唐&新羅）に敗れ、日本防衛のため防人など派遣して唐&新羅軍に備えた。壬申の乱で、天智の（弟：大海人皇子 VS 子：大友皇子）戦いの末、弟；天武が勝利した。

◎天武天皇は国家体制を固め、律令と歴史書の作成をおこなった。

◎日本書紀は40年かけ30巻。編者は皇族達。1.2は神話。3~30は天皇記。

◎古事記は4か月3巻。天武が稗田阿礼に正しい記録を繰り返させ、それを太安万侶が編集した。

神野志隆光著<古事記の世界観>

◎葦原中国を語る上巻を承け、中・下巻は、葦原中国によって保護された世界としての、天皇たちの世界、天下を語り継ぐ。

◎天皇たちの天下など知りたくないと思っているが、記紀というのは、本来は天皇家の歴史。神話の時代があり、天皇家に歴史をつないでいくのが主題である。「天皇家 そんな 人の家のこと・・・」そういわずにちょっとだけでも覗いて見ては、ということにちょっとだけ。

◎葦原の中つ国とは、高天原よりいえる名にして・・・。記紀では、此の名はおほく、天の上にしていう。

◎書紀に即してまとめれば、天の側から、最良の中央、イネの豊穰たるべき、天孫の王となるべき世界として捉えすえてきた地上世界。そこから現実の天皇が統治する世界に続くものとして位置付けるのが、「葦原中国」

◎初代：神武天皇：九州日向、宮崎県で生まれた。兄弟二人が、天下を治めるべきよき場所を求め、東に行こうとする。一行は高千穂を出発し、大阪湾から大和に向かうが、生駒の豪族の抵抗にあい、兄が負傷し紀伊国で死ぬ。熊野から大和に向かう。八咫鳥の先導を受けた。土蜘蛛を打ち破り、ヤマトの平定が終わり、畝傍山のほとり、橿原に宮殿を造らせた。この兄弟の弟が初代、神武天皇である。神武天皇稜は橿原神宮そば。

◎第十代：崇神天皇：疫病が流行した。夢でオオモノヌシがあらわれ、「私を祀れ」と託宣を下す。オオモノヌシを祀ったら、神の祟りはおさまり、天下泰平に、人民が栄えた。

◎第十一代：垂仁天皇：任那と新羅の抗争事件。新羅王子の渡来伝説。伊勢の祭祀のはじまり。埴輪の起源。

日本の天皇が、古来、朝鮮半島に直轄地を持っていたり、利権を掌握していた、と主張するのが、日本書紀の筆法のような。百済は進んだ学術、技術を身につけた人物などを送ってきて、見返りに、倭の兵力を求めた。

◎第十二代：景行天皇の子：日本武尊：ヤマトタケル。16歳で熊襲を、次いで出雲を征伐し平定する。西の国は静まった。東の国が、蝦夷が謀判を繰り返すようになり、天皇から東国平定を命じられた。スサノウが得た神剣、「天叢雲剣：あめのむらくものつるぎ」を受けられ、征途につきます。記紀ではコースが違う。古事記では、伊勢、尾張、駿河、上総、筑波、甲斐とまわり、伊勢で病み疲れ亡くなる。

◎第十四代：仲哀天皇の妻：神功皇后：軍を率いて韓国にわたり、韓国の三国：新羅・高麗・百済を治めた。国内では、異母兄の忍熊王の反逆を制圧したという武勇伝。

◎第十六代：仁徳天皇：難波高津宮に都を移す。人家から炊煙がないことに気づき、税を免除。大規模な感慨工事を実施。一方、好色な天皇として、人間臭い一面も描かれている。

◎大阪府の堺に、「仁徳天皇陵」がある。あれが仁徳天皇陵、世界で一番大きな古墳だと教わってきた。少年時代バスで海水浴に行く道中に小山が見えていた。それが仁徳天皇陵だと教えられた。もう熟年になったところに、「仁徳天皇がいたのかいないのか・・・」と聞かされ驚いた。現在はこの古墳は、「大仙陵古墳」と云われている。

◎折口信夫：我々の国には、色好みの神あり、色好みの帝あり、そしてそれがみな人間の手本とも言ふべき生活をしてきたものと認められていた。大国王もそうであり、人間世界では、高津の天皇が、もっともその規範でいられる。これを日本人は攻撃する理由がない、日本人はその生活をすべて容認しなければならないという理解のもとに、幾代も経てきている。むしろ積極的に、そういう人は、色好みの生活をしなければならぬとすら考えていたものと思われる。多くの女性に逢い、多くの女性の愛を抱擁し、多くの女性を幸福にし、広い家庭を構え、多くの児孫を持つということが、古代の人として、何の欠陥もないはずである。結局はその尊い人の徳ということになっている。<ほんまかいな 折口先生・・・>

◎第二十一代：雄略天皇：反抗的な地方豪族を力でねじ伏せ、ヤマト王権の力を飛躍的に拡大させた専制君主として君臨した。雄略元年は書紀によると西暦457年。それまで倭国は有力豪族連合体であったが、雄略の登場により天皇の統治が確立され、天皇を中心とする中央集権体制が始まった、という見方もある。

◎雄略天皇と思われる名が刻まれた、鉄刃、鉄剣が熊本、埼玉で見つかったことから、5世紀後半にはすでに、ヤマト王権の支配圏が九州から関東まで及んでいたことが推測される。

◎第二十五代：武烈天皇：10歳で即位。18歳で崩御。書記では、暴君として諸悪をなし、一善も修めたまわず。ここで皇位継承者がなくなった。

◎第二十六代：継体天皇：近江で生まれ、応神天皇の5世孫を迎える。

◎越前・近江に勢力を持っていた豪族が、武烈後、皇統が絶えた機会に、皇位を篡奪したという説がある。ただ、皇位を篡奪の争いの記録はない。58歳で、樟葉宮で即位。

◎福井県で生まれ、滋賀県に住んでいた。我が住まいの近所に、宮内庁が管理する、継体天皇陵がある。ほんとうはこっちが本物の継体天皇陵と、1キロ2キロ離れたところの今城塚古墳で発掘作業が行われ、「ダイオウの杜」として保存されている。宮内庁に遠慮して、継体古墳とは言わず、こんな呼び名に、という裏話が聞こえる。何度か行ったが、規模の大きいこと、埴輪群のすごいこと、石棺もすごい。

◎第二十九代：欽明天皇：ヤマト政権下、大伴・物部・蘇我の三者が力を持っていた。大伴が失脚。当時朝鮮半島に、任那という拠点があったが、任那が滅び、友好国の百済が弱体化。仏教が百済から伝わってきたことで、その受け入れをめぐり、蘇我と物部が対立。

◎第三十三代：推古天皇：初の女性天皇。蘇我氏を父に持つ。濃い血縁の聖徳太子が摂政に、蘇我馬子と聖徳太子の政治が始まった。太子は遣隋使派遣・十七条憲法・仏教奨励・四天王寺・法隆寺建立。「日の昇る国から」の挨拶状を持って行った遣隋使は小野妹子。現代では、当時の功績が、聖徳太子一人でなされたものでないと否定され、「厩戸王」記される。

◎日本書記、神話が終わって、初代天皇からの歴史、簡単にあらずじをと進めたが、なかなか膨大で奥が深い。現代語訳でも簡単に読めない。幾多の固有名詞、人の名、国の名が出てくる。いずれまた・・・。

Richard Wrangham リチャードランガム著<How Cooking Made Us Human 火の賜物:ヒトは料理で進化した>

◎考古学の本なのか、グルメ学の本なのか。先日シェフの映画を見た、フランス料理の二つ星シェフが腕を振っている、一昔前なら、「おお フランス料理は こんなに旨そうなのか」と驚いたと思うが、最近では慣れている、慣れているというのはしょっちゅう喰っているということではなく、TV 画面で何度も見て知っているということだが。ただ実際に。旨いものを喰いに行っていない、これはいささか残念だ。

◎グルメブーム、旨いものを探して TV カメラがあちこちの店を探す、料理人の作業をカメラに映す、料理人の解説が入る、評論家の解説が入る、皿に盛り、実に手際よく、旨そうだ。そんな料理を旨そうに食べる人の顔は、まさにほっぺが落ちそうだ。ただ映像だけでは、口の中に入ったときのあの感動は伝わらない。食いものというものは、まず、匂い・味・雰囲気・だれと喰うのか、こういうことが大事だからね。今更ながらと思うかもしれないが、えらそうなことをいうが、音楽も絵も舞台も、ほんま物を見ないと、動画や画集はいけませんぞ。

◎これまで何百もの狩猟採集民の文化が記録されているが、そのすべてにおいて、肉食が食生活の重要な部分を占めている。とはいえ、狩猟だけでは、毎日の満足な食糧が得られない。狩猟採集生活の中で、採集はほとんど女性たちがおこない、全カロリーの半分をもたらしていたのでは。

◎脳の小さい私たちの祖先は、危険な動物と対決せずには、肉を得ることができなかった。身体能力の不足、動きが鈍く、体も小さく、歯や手足も武器にはならなかった。道具も石か棒の域を出なかったのでは。

◎狩るヒトへの変化は、長距離移動、大きな体躯、知性の発達、協力協調、ヒトのヒトたる特徴を生んでいった。

◎ヒトは、まず最初に肉食で、類人猿から分かれていき、続いて食物を火を用いて料理して食べたのでは・・・

◎ダーウィンも、ヒトの祖先が火を使用したときには、すでにヒトになっていたと想定していた。この本では、ヒトは、火を用いて料理することによって、ヒトが進化したのだ、と述べている。

◎200 万年前～20 万年前、ホモ・エレクトスから、ヒトの解剖学的特徴は変わらず、石器と槍がでたぐらいだ。

◎ダーウィンが示唆したように、料理は生物学的に重要ではないのか。料理は人間性に欠かせないものか。

◎生食主義者の実験。類人猿に近い食生活を実験した。果物、野菜、種・・・最近よく言われる健康診断の数字ということで、身体は健康になり体重が減った。男女ともに性的機能が減少したらしい。我々の市場で売っている果物、野菜、種・・・は高カロリーでおいしい。野生の類人猿が食べている、自然の中にある、果物、野菜、種・・・は、おいしいものもあるが、堅い、渋い、消化しにくい、毒があるやも。

◎肉食者とベジタリアンを比較して、料理をしたものでは、両者は変わらない。ともに健康で、やせもしない。

◎人の消化器官は、類人猿と比べ小さい。口、歯、顎、胃、腸・・・料理したものを食べるのに適応している。

◎火が恒常的に料理に使われだしたのはいつごろかわからない。遺跡の痕跡には、50 万年前に火の跡はあるが。

◎25 万年前ネアンデルタール人が、火を利用し、料理をした痕跡が残っている。例えば松笠を温め種を食べた。

◎ヒトは料理を始める前に、暖を取り、光を得るために火を利用したという説があるが、多くの動物は生食より料理した食物が好きだ。太古の祖先も、料理したものが好きだったのではないだろうか。

◎多くの食物は料理をすると味が変わる・苦みや渋みが減り、甘みが増す。

かつて、澤山さんとの山行で、年に一度ぐらい、「焚火山行」があった。四五人で山の中の奥深い流れのそばにはいり、テントを二三張り、夜になると焚火をして楽しんだ。昔は山の中、あちこちで焚火の跡があった。昨今そういうことをする人が少なくなった。半世紀前までは、山の飯は火を燃やして作った。石を探してコンロを作り、燃えそうな木の枝をひとだかえも集め、まずは葉っぱや小枝から火をつけていく。うちわであおぐあおぐ、けむい、ちよろちよろ火がおこりだす。次に米を炊く。その次は鍋だ、乾杯だ、宴が続いた。夜の真っ暗の中、赤い炎を見つめ、酩酊して、シラフに潜り込んだ。獣たちが遠巻きに、けむいと嫌がっていたかな。

服部敏良著<王朝貴族の病状診断>

◎かつての歴史上の人物たち、だれもが知っている貴族やら武将やらの病の話、これを TV で解説する番組をちらり見たことがある。「彼はこんな病で 苦しんでいた」ちらりなのでどこのだれがどういう病気だったのかは、オレの頭の中では定かでない。地位も名誉も金もあるその人物たちの、肉体的弱音を聞くのは蜜の味、なんて言うてはいけませんが、「そらあ 不摂生が」「いいものばかり 喰っているから」なんて悪態も付きたくなるのは下々の浅ましさかな。

◎本を読みだし、「あれれ むつかしい 古文が出てくる 現代訳が無い 読み下せない」と悪戦苦闘している。

◎風邪：風病といった。誰もが知っている単純な病気に見えるが、実は今日でも、その実態が明らかでない。当時は他の病気も包含した多くの総合的な総称だったらしい。破傷風・風疹・痛風・中風がその名残だ。

◎風邪をひく：中国では、吹く風が運ぶ邪気を引き込むことによる。

◎寸白（すはく）：寄生虫のようだ。長さ一尺 30 センチとか、四五丈 10 メーター以上とすさまじい話だけれど、それこそオレの幼少時代の日本は、まだまだ回虫君は盛んに見られた時代だった。

◎今昔物語：巻二十四：行典薬寮治病女 長年病気のため貧血し、顔面蒼白となり全身に浮腫を生じるに至った女が、典薬寮の医師によって寸白と診断され、適当の治療によって、治ったことを記している。寸白は條虫であり、その長さ七八尋（12~14 メーター）にも及んでいたことを記し、これを駆除することによって貧血も回復し、浮腫も取れたというのである。

◎藤原摂関時代の貴族はみずからの権勢を維持し、外威の権を得るためには、同族といえども、あらゆる術策を弄し、讒誣（ざんぶ：猜疑する）中傷を敢えてして、これらを陥れた。そのため、不幸になった、敗者になった者の恨みはきわめて深刻である。当時の人々は、悪疫の流行はもとより、個人の死亡も病気も苦しみも、すべて、「もののけ」のせいと考えた。真剣に祈祷さえ行えば、もののけは退散し、病気が治るものと信じていた。

◎大勢の僧侶や修験者を集めての祈祷、そのすさまじさは、かえって病人に悪影響を与えたであろう。病苦を物怪の祟りと恐れることは、神経質であり、センチメンタルな弱い性格の保持者にみられる。鎌倉時代には、武家政治となり、武士が心身を錬磨し、戦場で屍をさらすことを本懐とする時代になると、物怪を信ずることは少なくなってきた。

◎紫式部日記<中宮 中宮彰子お産の祈りの祈祷について>

御帳ひんがしおもては、<殿をはじめ人々が騒ぎながら、右往左往>うちの女房まいりつどひてさぶらふ、西には、御物怪うつりたる人々、御屏風一よろひをひきつぼね、つぼねぐちには几帳を立てつつ、修験者あづかりあづかりののしりいたり。<諸国の修験僧が参集し、調伏のため、空を飛び回っているのだろう>南には、やむごとなき僧正僧都かさなりいて、不動尊の生きたまへるかたちをも、呼びいであらはしつべう、たのみみ、うらみみ、声みなかれわたりにたる、いとみみじう聞ゆ。<中宮様の物怪が移った憑坐（よしまし：神霊が寄り付く人）を修験者が祈っている>北の御障子と御帳のはざま、いちせばきほどに、四十余人ぞ、後に数ふればいたりける。いささかみじろきもされず、気あがりて物ぞおぼへぬや。<居合わせた紫式部でさえ気あがりて物ぞおぼへぬや、というほどに、中略、無事出産も過ぎ、いよいよ後産のときには>今とてさせたま給ふほど、御物怪のねたみののしる声などのむくつけさよ。<中略>阿闍梨の験うすきにあらず、御物怪のいみじうこはきなりけり。